

## § 7.4 大標本による母比率の区間推定

母比率が  $\rho$  である無限 2 母集団から無作為抽出した標本の大きさ  $n$  が充分大きいとします。中心極限定理より導かれる定理 5.4 より、標本比率を表す確率変数  $R$  は近似的に正規分布  $N\left(\rho, \frac{\rho(1-\rho)}{n}\right)$  に従います。このことを用いて、 $0 < \alpha < 1$  である実数  $\alpha$  に対して、母比率  $\rho$  の信頼度  $\alpha$  の信頼区間を求めます。

標準正規分布  $N(0,1)$  の累積分布関数を  $\Phi(x)$  とおきます：

$$\Phi(x) = \int_{-\infty}^x \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \exp\left(-\frac{t^2}{2}\right) dt .$$

定理 7.2 より、正規分布に従う確率変数  $X$  の標準偏差  $\sigma[X]$  が分かるとき、 $X$  の実現値  $x$  に対して、 $X$  の平均値  $E[X]$  の信頼度  $\alpha$  の信頼区間は

$$\left[ x - \sigma[X] \Phi^{-1}\left(\frac{1+\alpha}{2}\right), x + \sigma[X] \Phi^{-1}\left(\frac{1+\alpha}{2}\right) \right] .$$

標本比率を表す確率変数  $R$  は近似的に正規分布に従いますから、 $R$  の標準偏差  $\sigma[R]$  が分かるとき、 $R$  の実現値  $r$  に対して、 $R$  の平均値  $E[R]$  の信頼度  $\alpha$  の信頼区間は

$$\left[ r - \sigma[R] \Phi^{-1}\left(\frac{1+\alpha}{2}\right), r + \sigma[R] \Phi^{-1}\left(\frac{1+\alpha}{2}\right) \right] .$$

標本比率を表す確率変数  $R$  は母比率  $\rho$  の不偏推定量です： $E[R] = \rho$ 。これより、 $R$  の標準偏差  $\sigma[R]$  が分かるとき、 $R$  の実現値  $r$  に対して、母比率  $\rho$  の信頼度  $\alpha$  の信頼区間は

$$\left[ r - \sigma[R] \Phi^{-1}\left(\frac{1+\alpha}{2}\right), r + \sigma[R] \Phi^{-1}\left(\frac{1+\alpha}{2}\right) \right] .$$

標本比率を表す確率変数  $R$  の標準偏差  $\sigma[R]$  を考えます。 $R$  は近似的に正規分布  $N\left(\rho, \frac{\rho(1-\rho)}{n}\right)$  に従いますから、 $V[R] \doteq \frac{\rho(1-\rho)}{n}$ 、 $\sigma[R] \doteq \sqrt{\frac{\rho(1-\rho)}{n}}$ 。母比率  $\rho$  の値が分かりません（母比率の値が分かっていたら区間推定などしません）が、ここでは標本の大きさ  $n$  が十分に大きい場合を考えていますから、標本比率が母比率とほぼ一致すると考えて差し支えありません。そこで、普通は母比率  $\rho$  を標本比率  $r$  で近似します： $\sigma[R] \doteq \sqrt{\frac{r(1-r)}{n}}$ 。故に、 $R$  の実現値  $r$  に対して、母比率  $\rho$  の信頼度  $\alpha$  の信頼区間は

$$\left[ r - \sqrt{\frac{r(1-r)}{n}} \Phi^{-1}\left(\frac{1+\alpha}{2}\right), r + \sqrt{\frac{r(1-r)}{n}} \Phi^{-1}\left(\frac{1+\alpha}{2}\right) \right] .$$

このようにして次の公式が成り立ちます。

**公式 7.4** 標準正規分布  $N(0,1)$  の累積分布関数を  $\Phi(x)$  とおく。無限 2 項母集団から無作為抽出した標本の大きさ  $n$  が充分大きいとする。標本比率が  $r$  であるとき、母比率の信頼度  $\alpha$  の信頼区間は

$$\left[ r - \sqrt{\frac{r(1-r)}{n}} \Phi^{-1}\left(\frac{1+\alpha}{2}\right), r + \sqrt{\frac{r(1-r)}{n}} \Phi^{-1}\left(\frac{1+\alpha}{2}\right) \right]$$

で与えられる。

**例題 7.4** 大きさが約 73 万の 2 項母集団から大きさ 1000 の標本を無作為に非復元抽出する。標本比率が 0.6 であるとする。母比率の信頼度 99% の信頼区間を求めよ。

母集団の大きさ約 73 万に対する標本の大きさ 1000 の比率は非常に小さいので、母集団を無限母集団とみなす。標準正規分布  $N(0,1)$  の累積分布関数を  $\Phi(x)$  とおく。母比率の信頼度 99% の信頼区間は、

$$\begin{aligned} & \left[ 0.6 - \sqrt{\frac{0.6 \times 0.4}{1000}} \Phi^{-1}\left(\frac{1+0.99}{2}\right), 0.6 + \sqrt{\frac{0.6 \times 0.4}{1000}} \Phi^{-1}\left(\frac{1+0.99}{2}\right) \right] \\ &= \left[ 0.6 - \sqrt{\frac{6}{25000}} \Phi^{-1}(0.995), 0.6 + \sqrt{\frac{6}{25000}} \Phi^{-1}(0.995) \right] \\ &\doteq \left[ 0.6 - \frac{\sqrt{15}}{250} \cdot 2.576, 0.6 + \frac{\sqrt{15}}{250} \cdot 2.576 \right] \\ &\doteq [0.560, 0.640] . \end{aligned}$$

終

**問題 7.4** 大きさが約 38 万の 2 項母集団から大きさ 400 の標本を無作為に非復元抽出します。標本比率が 0.8 であるとします。母比率の信頼度 95% の信頼区間を求めなさい。